

戦時体験をどう伝えるか — 慰霊の日企画展での イラスト作成の試み —

恩納村史編さん係では、毎年恩納村博物館で恩納村の戦争に関する企画展を慰霊の日に合わせて実施しています。その際、文字だけではどうしても想像しにくい体験や証言があり、写真や映像が残つていらないこともあります。そのため、2018年『戦場になつた恩納岳』から、よりイメージしやすくなるようイラストを描いて展示しています。今回はその企画展で使用したイラストをいくつか紹介します。



① ほふく 匍匐前進の訓練

たちがどんな訓練をしていたのか（①）、山中での戦闘はどのようなものだったのか（②）を想像できるよう工夫しました。護郷隊のことはまだあまり知られておらず、写真が一枚も無いことから、体験をどうイラストにするのか大変悩

2018年慰靈の日企画展 【戦場になつた恩納岳 少年

イラストを展示するのはこの企画展が初めての試みでした。「護郷隊」というこれまであまり知られていなかつたテーマだつたこともあり、村内外の多くの方に見ていただきました。

みました。たとえば②のイラストは、「自分と5mくらい離れて構えていた兵隊の前に迫撃砲が落ちてきて、吹っ飛ばされた。砂もかぶるんです」という証言をもとにしました。展示用のイラストは証言や資料についてイメージしやすく、わかりやすくするために、線や色の塗り方、服装・表情などもかなり簡略化して漫画的な表現で描いています。



②目の前に迫撃砲が落ちてきたという証言

2019年【恩納村に近づく戦争の足音】

この展示では、当時の一般の人々の生活の様子を描きました。金属の供出や農作物の増産、出征の様子（③）、恩納村内でも証言の多い伊江島飛行場建設の様子（④）などです。中でも出征の様子は、見送られる側の家族の表情をどう描くかが一番難しく、悩んだところです。